

1 趣旨

体験活動を通して、子ども食堂を利用している青少年の基本的な生活習慣や自立する力を育むことを目的に実施する。

2 期日

令和8年1月10日（土）～12日（月）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

4 参加者

33名（小学生15名、中学生18名）

5 主な活動内容

(1) スノーシューハイキング・雪のテーブル作り

研修指導員のもと、町営牧場を目的地にスノーシューでハイキングをした。参加者からは「疲れたけれど、スノーシューハイキングや雪のテーブル作りは普段できない体験だった。」「動物の足跡が見られて楽しかった。」等の声が聞かれた。大自然の大きさや、目的地の町営牧場まで歩ききった達成感、自分達で協力して雪のテーブルを作ることによる満足感を味わうことができた。



(2) 雪像作り・マシュマロ焼き

参加者は道具を用いて、役割分担をしながら班ごとに思い思いの雪像を作ることができた。夜は自分たちで作った雪像を見ながら、マシュマロ焼きを実施した。参加者からは「協力して雪像を作ることができて楽しかった。」「焼いたマシュマロを初めて食べて美味しかった。」等の声が聞かれた。



(3) 自主性を大切に活動（雪遊び、体育館でのスポーツ等）

前日のミーティングで場所と道具、可能な活動の中から、各自がどのような活動をして過ごしたいか話し合い、参加者の自主性を大切に活動を行った。参加者からは「友だちと話しながら雪の活動ができて楽しかった。」「室内でいろいろなスポーツができて楽しかった。」等の感想が聞かれた。



6 事業の成果と課題

(1) 成果

事業前と事業後にアンケートをとり、参加者の変容を調査した。「基本的な生活習慣」や「自立する力」の項目において、事業後の平均値が上昇していることから、目的に沿った活動を提供できた。「牧場にたくさんの雪があつて楽しかった。」「雪のテーブル作りは大変だったけど、協力して作ることができてよかった。」「初めて会った人とも仲良くなれてとても嬉しかった。」といった感想が見られた。共に活動する仲間を受け入れて尊重しようとする気持ちや、年長者が年少者を気遣うあたたかさ、自分自身で活動を選択して最後までやり遂げる心地よさを味わうことができた。

(2) 課題

事前アンケートの「活動がどれくらい楽しみか」と事後アンケートの「活動にどれくらい満足したか」の項目の最上位値を見てみると、事前の「楽しみ」よりも事後の「満足」の方が低くなった。これは悪天候によって参加者が期待していた活動を実現できなかったことや主体的に活動する時間が制限されてしまったことが要因だと考えられる。参加者の期待に応えられるような代替案の活動を、連携機関と担当者間で話し合ったうえで、参加者が見通しをもつ時間を保証することにより、参加者が更に満足できる活動を提供できたと考える。

令和7年度 全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」
国立磐梯青少年交流の家 教育事業 報告書

1 趣旨

体験活動を通して、高校生の物事を探究する姿勢、主体的に取り組む態度、課題に向き合う力を育成することを目的に実施する。

2 期日

令和7年4月18日（金）～令和8年1月24日（土）（計8日）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家
福島県立猪苗代高等学校
磐梯山
五色沼湖沼群



4 参加者

51名（高校生51名）

5 主な活動内容

(1)五色沼湖沼群散策（フィールドワーク）

五色沼湖沼群の成り立ちや植生などについて学びながら散策した。生徒からは「噴火によってこんなにきれいな景色ができたなんて信じられない。」「沼ごとに色が違うのが磐梯山と関係しているとは思わなかった。」などの声が聞かれ、過去の噴火が地域に与えた影響について関心が高まった。

(2)震災講話・さすけなぶるワークショップ・HUG実践（講義・演習）

福島県立博物館主任学芸員 筑波匡介氏を講師に招き、災害現場や避難所で実際に起きている課題や現状について学んだ。「日頃からの備えが大切であることが分かった。」「いざというときに自分に何ができるか考えることができた。」などの声が聞かれ、災害を自分事ととらえて考えることができた。

次に、福島県防災士会理事 鈴木里美氏を講師に招き、さすけなぶるワークショップに取り組んだ。「さりげなく、すばやく、けむたがらず、ないものねだりをやめて、ふるさとのような」の5つのキーワードに基づきながら、東日本大震災の際にビッグパレット福島で起こったトラブルに対する柔軟な対応について考えた。その後、ワークショップで学んだことを生かしてHUG（避難所運営ゲーム）に取り組んだ。多様な背景をもつそれぞれの避難者が安心して生活できるようにグループ内で意見を交換しながら避難所運営について考えを深めた。生徒からは「人を救うのは人という言葉が心に残った。」などの感想が寄せられ、発災時における人と人との繋がり的重要性について理解が深まった。

(3)磐梯山登山

磐梯山の過去の噴火の様子や生息している動植物などについて学びながら登山を行った。「自然がいっぱいで噴火があったなんて信じられない。」「たくさんの人にこの景色を見てほしい。」などの声が聞かれ、自然の雄大さについて実体験を通して学ぶことができた。

6 事業の成果と課題

(1)成果

昨年に引き続き、全学年でのオリエンテーション合宿を継続したことで、上級生がリーダーシップを発揮し、下級生は自身の役割を果たそうと主体的に活動する態度が醸成された。

また、登山では、生徒たちの体力に応じたコース設定をし、余裕をもって活動できたことで、周りの景色に関心をもったり、研修指導員の話に耳を傾けたりと、それぞれの関心に応じた活動をすることができた。

(2)課題

オリエンテーション合宿の際に発災時を想定してアイラップ調理を行ったが、水道を使ったために水の節約に気付かない班が見られた。使える水の量を限定するなど、活動にリアリティをもたせることで、備蓄の重要性や災害時の生活の工夫について学びを深めることができたと考える。

令和7年度 国立磐梯青少年交流の家教育事業 スマイルばんせい 報告書

1 趣旨

家族で体験活動を楽しむことを通して親子でのコミュニケーション促し、家庭教育の充実を図ることを目的に実施する。

2 期日

令和7年10月19日（日）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

4 参加者

家族 415名（大人 207名、小学生 161名、未就学児 47名）

5 活動内容

福島県内の小学生を含む家族を対象に、当施設の体験ブースと地域の協力団体ブースの計15箇所のブースを設置して開催した。当施設では、たき火体験、ばんせい探偵団、赤べこ絵付け体験、館内オリエンテーリングなどの体験ブースを設置した。地域協力団体として、アクアマリンいなわしろカワセミ水族館や磐梯山ジオパーク協議会などのワークショップや警察車両、消防車両の展示ブース及び昨年に引き続き書道パフォーマンス体験のブースを設置した。また、食堂での昼食には磐梯山ジオパーク協議会発案の「磐梯山ジオパークカレー」を提供した。

6 成果と課題

(1) 成果

今年度は、地域協力団体を加えての事業としたことで、参加者が昨年度比およそ3倍の415名となった。全体満足度は「満足」76%、「やや満足」24%であり、肯定的評価が100%となった。全体の満足度に関して、参加者からは、「施設全体が広く、体験したいブースが様々なところにあるため、自然と体を動かすことができた。」「普段できない体験ができた。」「子供が友達と協力し、縦横無尽に施設内を探検していて、楽しそうに取り組んでいた。」「様々な体験活動を通して、家族の絆がより深まった。」という評価を得られた。このことから、親子のコミュニケーションを促す契機となったことが伺える。

また、協力団体のブースに関しても、参加者からの「楽しかった。」「学びがあった。」という感想や、地域協力団体の代表者から「貴重な機会となった。」「協力してよかった。」という意見から地域とつながった体験活動を展開することで、参加者にとっても、地域協力団体にとっても、より満足のいく教育事業となったことが伺える。



(2) 課題

アンケートからは「受付の時間が長かった。」「受付を効率的にしてほしい。」といった受付方法に関する記述が多くあった。今年度は4名体制で受付を行ったが、参加者が400名を超えたことにより、待ち時間が非常に長くなってしまった。現金とPayPayの2通りの支払い方法に対する整列方法が明確になっていなかったことが要因として考えられる。次年度は、受付人数を増やす対応、整列方法の看板増設や事前支払制の導入などを検討することで、待ち時間の緩和につなげる。

1 趣旨

国立青少年教育機構のボランティア養成カリキュラムに沿った講義や演習などを通して、青少年教育ボランティアを養成することを目的に実施する。

2 期日

令和7年5月24日（土）～25日（日）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

4 参加者

42名（高校生5名、短期大学生7名、大学生30名）

5 主な活動内容

(1)青少年教育の理解（講義）

常磐大学人間科学部教育学科准教授 松橋義樹氏を講師に招き、青少年教育の対象や体験活動の効果、意義についての講義を行った。参加者からは「青少年教育の対象に自分自身も含まれていることを学んだ」、「体験活動の必要性を理解することができた」などの感想が寄せられ、ボランティア活動と青少年教育の関係性について理解が深まった。



(2)ボランティア活動の技術（演習）

ボランティア活動を行う際の安全管理について、野外炊飯を事例に演習を行った。道具の扱い方や調理を行う際の注意点、安全に活動するための留意点について学び、野外炊飯棟でカレー作りを行った。「自分の役割に責任をもって安全に活動できた」「安全に活動するためのポイントを知ることができた」などの感想が寄せられ、安全に活動するための技術を高めることができた。



(3)青少年教育施設におけるボランティア活動（講義）

磐梯青少年交流の家のボランティア活動の内容について、先輩ボランティアがこれまでの経験をもとに紹介をしたり、説明をしたりした。参加者からは「先輩ボランティアの話聞いて磐青での活動について具体的なイメージをもつことができた」などの感想が寄せられ、実際の活動への意欲が高まった。



6 成果と課題

(1)成果

先輩ボランティアから、ボランティア活動についての体験談や活動を通して学んだことを聞くことで、参加者はボランティア活動についての具体的なイメージをもち、今後のボランティア活動への意欲を高めることができた。また、ウェブアンケートを活用し、参加者の思いや意見を即時に反映しながら進めたことで、講義に対する関心を高めたり、グループ外の参加者同士の意見を共有したりすることができた。

(2)課題

当日の時間設定に余裕がなかったことから、今後は参加者同士で協議したり、演習の際に試行錯誤を重ねたりする時間を十分に確保したスケジュールを計画する必要がある。

令和7年度 国立磐梯青少年交流の家教育事業 高校・大学生の体験活動支援の推進事業
「Step Up Now!!～仲間との絆で踏み出す一歩～」報告書

1 趣旨

ボランティアが教育事業等の企画運営を通して、青少年教育ボランティアに必要な技術等のスキルアップを図るとともに社会参画への意欲を高めることを目的に実施する。

2 期日

(1) 令和7年5月25日(日) (2)令和7年10月4日(土) (3)令和7年10月26日(日)

3 会場

国立磐梯青少年交流の家(福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原7136-1)

4 参加者

13名(高校生5名、短期大学生1名、大学生7名)

5 主な活動内容

(1)ボランティア自主企画 企画立案会議(自主企画担当ボランティア:大学生2名、短期大学生1名)

学生が教育事業の企画を行うにあたり、まず当交流の家の企画指導専門職による事業の企画方法についての講義を受け、ねらいの立て方やプログラムの選定方法等を学んだ。その上で、事業に参加した子供たちがどのような姿になってほしいのかイメージをもたせ、実現のために必要なプログラムについて検討した。協議の結果、豊かな人間関係を築くために必要なコミュニケーション能力を高めることをねらいとし、野外炊飯や自然オリエンテーリング、木工クラフトなど「協働的な活動」を取り入れた事業を10月26日(日)に開催することを決定した。

(2)ボランティア自主企画 実地踏査(自主企画担当ボランティア:大学生2名、短期大学生1名)

当日行うプログラムについて、活動場所や使用する物品の確認、活動のシミュレーションを行った。自然オリエンテーリングは安全に活動できるよう、ルールや場所の確認等を行った。野外炊飯は、実際に調理を行いながら、作成した手順書を修正するとともに、刃物や火を安全に扱うために必要な注意事項について確認した。また、木工クラフトも、実際に創作活動を行い、どの場面で子供たちにコミュニケーションの機会を設ければ効果的か検討し、活動の流れを決定した。



(3)ボランティア自主企画 当日(自主企画担当ボランティア:高校生2名、短期大学生1名、大学生3名) (当日ボランティア:大学生3名、高校生3名)

(自主企画事業に参加した子供たち:小学校4年生11名、小学校5年生10名、小学校6年生3名)

合計12名のボランティアが前日準備、当日の運営を行った。前日から雨が降り、雨天プログラムの実施を決定し、使用物品の準備と、活動場所の再調整を行った。野外炊飯に時間がかかってしまい木工クラフトの活動内容を見直すことで対応した。予定通りの活動はできなかったが、ボランティア同士で意見を出し合って臨機応変に対応したことで、子供たちの満足度も非常に高かった。



6 成果と課題

(1)成果

先輩ボランティアが中心となり、後輩ボランティアへ子供たちへの具体的な声のかけ方や接し方について助言を行っていた。参加したボランティアからは「子供たちを信じて見守ることの重要性に気付いた」「一人一人の個性に応じた接し方を学び、子供たちへの関わり方の幅が広がった」など、参加した全てのボランティアが自身の成長を実感することができた。

(2)課題

事業当日が雨天であったり、野外炊飯の活動に想定以上に時間がかかったりして計画通りに進まない部分が多かった。天候や子供たちの活動の様子などについて、自主企画担当ボランティアと職員で様々なケースを想定し、対応策をさらに丁寧に検討しておく必要がある。

1 趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知らせ、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

2 期日

令和7年8月5日（火）～7日（木）

3 会場

福島県環境創造センター交流棟 コミュタン福島（福島県田村郡三春町深作 10-2）
いわき市漁業協同組合（福島県いわき市中央台飯野 4-3-1）・沼の内漁港（福島県いわき市平沼ノ内浜街）
宇川ブルーベリー園（福島県耶麻郡猪苗代町三ツ和五十軒 3358）
国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

4 参加者

38名（小学生27名、中学生11名）

5 主な活動内容

(1) オープニング、コミュタン福島での東日本大震災を考える活動

オープニングでの未来塾紹介動画視聴や、担当による説明により、今後の活動の見通しをもつことができた。コミュタン福島の見学や放射線測定実験では、東日本大震災や原発事故の被害について詳しく学ぶことができた。参加者からは「森林の除染がもっと進めばいいのにどうして行わないのだろう。」「震災や原子力発電についてもっと知りたいと思った。」等の声が聞かれた。



(2) 福島県の水産業や農業について考える活動

経済産業省資源エネルギー庁の職員を講師に招いて、ALPS 処理水の放出や安全性について学び、それをどのように世の中に発信していくか等について考えた。またホッキ貝の殻むき体験や、魚の重さを当てる入札体験等を行った。「ALPS 処理水の安全性や福島のおいしさをもっと伝えたい。」「いわき市には美味しい海の幸がたくさんあることが分かった。」等の声が聞かれた。



(3) 能楽体験を通して伝統文化を学ぶ活動

会津能楽会の方から能楽の歴史について学び、実際に道具（楽器）に触れて演奏をしたり、面をつけたりする体験を行った。能管（笛）の高い音を聞き、『蜘蛛の巣』という特殊な道具を見せてもらうことを通して「迫力のある演技に驚いた。」「これからの日本や地域の文化を大切にしたい」等の声が聞かれた。



6 成果と課題

(1) 成果

「東日本大震災の大きな揺れと津波、原子力災害を学んだ私たちがその記録を未来へつないで、今ある課題を乗り越え、持続可能な美しい世界を作り出していきたい。」「過去のことだけでなく、未来のことについて学べた。」などの感想から、参加者が震災の被害について知るだけでなく、復興に向けての歩みや努力、自分たちにできることについても目を向けて活動できたことが伺える。

(2) 課題

参加者の様子について把握することができたので、今後の活動においてより一層効果的な活動を展開して目的にせまれるよう、班編成やボランティアの配置などを工夫していきたい。また、体験したことや感じたことを「自分」とつなげて捉えることができるよう、活動を工夫していきたい。

1 趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知らせ、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

2 期日

令和7年9月6日（土）～7日（日）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

4 参加者

38名（小学生27名、中学生11名）

5 主な活動内容

(1) 福島のよさを考えながら「チームフラッグ作り」や「チームでの表現活動」を通してチームワークを高める活動

福島のよさ、自分の住む地域のよさを考えながら、チームに分かれてアイデアを出し合い、オリジナルのチームフラッグを作成したり、チーム名を体全体で表現したりする活動を行った。HEART Global キャストが思う福島のよさについても話を聞いた。参加者からは、「あらためて福島のよさに気づけたし、他の人の考えも分かった。」「福島県以外の人たちが福島についてどう思っているかなどを知って、もっと福島が大好き！と思った。」等の声が聞かれた。



(2) ダンスと合唱の練習を通して表現する楽しさを知る活動

苦手なことにチャレンジする気持ち、失敗を楽しむ気持ちをキャストの方から学び、ダンスや合唱に挑戦した。「ダンスが嫌だったのに、みんなに背中を押されてやってみると楽しくて驚いた。」「ダンスを楽しく踊ることで、自分って踊ることが好きなのだ気づくことができた。」等の声が聞かれ、多くの参加者が表現する楽しさを味わえたことが伺える。



(3) 練習したことを観客の前で表現する活動

2日目の最後、保護者にショーを披露した。ダンスや歌、手話を練習してひとつの形にまとめる過程で、友達を思いやる心やチャレンジする気持ちの大切さに気付く場面が多くあった。参加者からは「仲間と教え合えたから満足している。」「ショー本番のダンスはとても楽しかった。このワークショップで挑戦する楽しさを知った。」「みんなで挑戦する楽しさを味わった。達成感を感じている。」等の声が聞かれた。



6 成果と課題

(1) 成果

「仲間と気づかい合って活動することができ、失敗することが怖かったけれど頑張れた。」「この活動を通して、仲間との協力や思いやり友情が大切だと感じた。」「前よりも積極的に声をかけてみたら、仲良しの人が増え、一人じゃないのだと安心して活動ができた。」等の感想から、仲間と協力して物事に挑戦することで、自分自身の新たな可能性に気付いたり、互いに思いやり合うことの価値を感じたりすることができた参加者が多かったことが伺える。

(2) 課題

活動に対する参加者の苦手意識、不安にしっかりと向き合い、スタッフやボランティアで情報を共有することで、参加者同士がよりよい関わりをもてるよう支援していきたい。

1 趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知らせ、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

2 期日

令和7年9月27日（土）～28日（日）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

ユラックス熱海（福島県郡山市熱海町熱海 2丁目 148-2）

磐梯熱海アイスアリーナ（福島県郡山市熱海町玉川反田 1-1）

4 参加者

36名（小学生26名、中学生10名）

5 主な活動内容

(1) UNITED SPORTS FOUNDATIONの4つのクリニック（種目）を通して新しいことにチャレンジする

- ① 「バドミントン」では、世界で活躍する桃田 賢斗選手、福島県バドミントン協会や福島県立ふたば未来学園の方々から基礎やコツを教わった。「憧れの桃田選手に応援してもらえた。」「今後バドミントン部に入りたい。」等の声から、夢や将来を考える機会となったことが伺える。
- ② 「車いすバスケットボール」では、TOKYOパラリンピック2020銀メダリストの豊島 英選手を講師にTEAM EARTHの方々と活動した。車椅子の操作が難しく、試行錯誤しながら活動する様子が見られた。「初めてだったが楽しくできた。」「興味を持つことができた。」等の声が聞かれた。
- ③ 「アイスホッケー」では、U18女子日本代表監督の笠原 裕二郎選手をはじめ、アイスホッケーの世界で活躍する方々と活動した。何度も転んでは立ち上がり、活動終盤ではゴールを決める粘り強い姿が見られ、「最初は滑るのが難しかったけれど、アドバイスをもらいコツを掴むうちに滑ることができた。」等、達成感を感じられる声が聞かれた。
- ④ 「アルティメット」では福島県フライングディスク協会の方からアルティメットの基礎を教わった。「初めて聞いたスポーツだったが、とても楽しかった。」「練習するうちに上達して嬉しかった。」等の声から、初めての種目にも積極的に挑戦しようとしていたことが伺える。

(2) 「ユニフォーム作り」「チア作り」「スポーツ大会」を通してチームワークを高める活動

チームごとに協力してユニフォームとチア（応援歌）作りを行った。スポーツ大会ではバスケットボールとリレーを行い、自分たちのチームのチアを、自信をもって歌ったり、時には他のチームを応援したりと、チームワークを発揮して活動に取り組む姿が見られた。

6 成果と課題

(1) 成果

「新しいことにチャレンジする大切さを知った。」「スポーツをすることは、もともと好きだったが、今後は新しいスポーツにも挑戦したい。」等の感想から、「新しいことにチャレンジできる」という今回のテーマを達成できたことが伺える。また、「福島県出身の人が日本や世界で活躍していてすごいと思った。」「大きくなったらスポーツ選手になりたい。」等の感想から、将来に希望をもつことのできる体験になったのではないかと考える。

(2) 課題

実施後のアンケートから、「福島の良いところ」を意識しづらかったことが伺える。福島県に所縁のある選手が活躍していることや自分に向けたスポーツで活躍できる機会があることをより強調して伝えることで、福島の良いところを考えるきっかけになったのではないかと考える。



1 趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知らせ、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

2 期日

令和7年10月11日（土）～13日（月）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）
杉妻会館（福島県福島市杉妻町 3-45）

4 参加者

39名（小学生28名、中学生11名）

5 主な活動内容

(1) OB・OGと共に国際交流プログラムに取り組み、親睦を深める活動

初めて出会うOB・OGとイングリッシュオリエンテーリング～未来塾Version～と、イングリッシュ de ニュースポーツ（モルック）を行った。OB・OGは11歳～20歳と年齢の差も大きく、英語学習の経験差もあったが、塾生と混合班で活動することで、自然と教え合ったり助け合ったりする姿を見ることができた。塾生からは「苦手意識を感じていたが、よく聞いて理解しようとしてみると、分かることも多いと気づいた。」「英語が通じると分かって嬉しかった。」「初めて会うOB・OGの人に緊張したけれど、驚くほどすぐに打ち解けられた。」等の声が聞かれた。



(2) OB・OGと共に野外炊飯に取り組み、協力の大切さを知る活動

OB・OGと共に野外炊飯（チキンカレー、スモア）に取り組んだ。多くの塾生、OB・OGが初めての野外炊飯活動であったが、役割分担を相談したり、協力して活動したりする姿が見られた。「かまど係で、火力をアドバイスしてもらったり、目が痛くて大変な時に代わってくれたりしてうれしかった。」「自然とみんなで協力して活動することができて、今までで一番おいしいカレーができた。」等の声が聞かれた。



(3) 未来塾を通して学び、考えたことを報告する活動

最終日には、これまでの活動を通して学び、考えたことを、各自が「希」「仲」「学」「輝」など漢字一文字で表現して報告発表を行った。全4回の活動を通してたくさんの体験をしてきたが、「未来塾で学んだことをそのままにするのではなく、人に伝えることが大切だと思った。」「友達と協力して福島の沼や湖をきれいにし、多くの人に喜んでほしい。」などの活動報告から、体験活動の一つひとつが塾生の心に響き、未来塾のねらいである「福島県の未来を考え、行動できる」に近づくことができたことが伺えた。



6 成果と課題

(1) 成果

「未来塾で学んだ全てのことを誇りに思って、福島のために自分から何かにチャレンジしたい。」「みんなの大切な福島を支える、守る人物になりたいという将来の夢ができた。」等の感想から、自分の夢や希望を広げ、福島県の未来を考え、自分にできることを考えるきっかけをつかむことができたことが伺える。また、一人ではできないことも仲間と協力することで成し遂げられること、何事にも挑戦する勇気をもつことの大切さを、実感をもって理解することができた塾生が多く見られた。

(2) 課題

「福島のことをもっと知りたい!」と思えるようなしなやかな更なる散りばめておくことで、未来塾の活動終了後も、それぞれが探究的な姿勢で学びに向き合えるのではないかと感じた。

5 福島「体験の風をおこそう」運動実行委員会事業

○事業目的

「体験の風をおこそう」運動の普及啓発のために、福島県内の多くの子どもたちに体験活動の楽しさを提供するとともに、保護者に体験活動の必要性や重要性を発信する。

(1) スマイルばんせい（詳細は P.11 参照）

(2) 地域イベントや他施設での「体験の風をおこそう」運動普及啓発活動

① 事業目的

「体験の風をおこそう」運動の普及啓発のために、地域のイベントにおいて出展を行い、体験活動の重要性について広く発信をしていく。

② 期日 イベント名【場所・人数】

- ・令和7年7月20日（土）～21日（日）
学びいな夏祭り【猪苗代町運動公園 213人】
- ・令和7年7月26日（土）～27日（日）
磐梯まつり 【猪苗代町運動公園 256人】
- ・令和8年1月13日（月）
猪苗代町十三日市【猪苗代町中央商店街 37人】



磐梯まつり（R7.7.26～27）

③ 成果

地域の各種イベントにおいて、体験の普及啓発活動を実施した。子どもたちや保護者、地域の方々に体験の機会を提供したことにより、あらためて体験活動の楽しさや重要性を実感していただくとともに、地域力向上の推進に努めることができた。

(3) 子どもゆめ基金説明会

① 事業目的

より多くの方々や青少年団体などに、子どもゆめ基金の趣旨を理解していただくとともに、申請の流れや申請書の書き方などの実務について知識を深めていただく。

- ② 期日：令和7年10月25日（土） ほっとあたま 4団体5名
令和8年 1月24日（土） オンライン 3団体4名

(4) その他（紺碧の猪苗代湖復活プロジェクト会議との連携）

① 猪苗代湖クリーンアクションへの協力【計2回】

- ・令和7年 6月28日（土）
- ・令和7年10月28日（火）

② 「猪苗代湖の自然を守る会」研修会の参加

- ・令和7年10月6日（月） 猪苗代湖水中調査船